

氏名 福 井 秀 樹

学 位 の 種 類 医 学 博 士

学 位 授 与 番 号 乙 第 971 号

学 位 授 与 の 日 付 昭和53年 6 月 30 日

学 位 授 与 の 要 件 博士の学位論文提出者  
(学位規則第 5 条第 2 項該当)

学 位 論 文 題 目 子宮頸部境界病変に於ける診断的円錐切除術の削減について  
削減安全域決定とその指標に関する研究

論 文 審 査 委 員 教授 寺 本 滋 教授 小 川 勝 士 教授 妹 尾 左 知 丸

### 学 位 論 文 内 容 の 要 旨

境界病変の診断に際し、外来で行い得る検査を用いて、どの程度診断的円錐切除術の削減が可能かを追及した。外来細胞診に加え、子宮腔部綿球擦過、頸管内綿棒擦過、頸管内 Curettage の部位別細胞診を施行し、計 4 種の細胞診結果を、class I. II. 0点, IIIa. 1点, III b. 2点, IV. 3点, V. 4点と点数評価し、合計点数を細胞診点数として、コルポ診、狙い組織診、円錐切除後連切診と比較検討した。その結果、細胞診点数は病巣の拡がり及び病変進行度をよく反映していた。そして細胞診点数を、① 4 点以下 (A 群), ② 5 ~ 8 点 (B 群), ③ 9 点以上 (C 群) と群別して、狙い組織診正診率、病巣の拡がり、占拠部位、病変進行度を検討した結果、A 群全例と B 群の子宮腔部限局病巣型の計 43 % は安全に診断的円錐切除術削減が可能と判断し得た。残る 57 % は、現段階では診断的円錐切除術の削減は危険と判断し得た。

### 論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

本研究は子宮頸部病変の診断に関する臨床的研究であって、部位別細胞診を組合せて点数評価を行いその結果に基づき診断的円錐部切除術の削減を試みたもので、削減安全域の決定とその指標確立のため重要な知見を得たもので、此の分野において価値ある業績であると認める。

よって、本研究者は医学博士の学位を得る資格があると認める。